

拝宮農村舞台 復活公演

喜多順三

六月六日（日曜日）、上那賀町拝宮の白人神社の農村舞台で半世紀ぶりの復活公演が行われた。あいにくの雨とはいえ、普段はひっそりとしているだろう神社の境内にはおよそ七五〇人の観客が詰めかけた。公演の冒頭には明治時代の徳島を代表する人形師・初代天狗久作で、拝宮地区に保管されていたえびすの木偶が登場、拝宮谷農村舞台保存会の人たちに操られて「舞台挨拶」が行われた。

次いで青年座の「寿式三番叟」が復活公演を祝い、「日高川入相花王 渡し場の段」と続き、川内北小学校人形浄瑠璃クラブの児童七人が「傾城阿波の鳴門 順礼歌の段」の芝居を演じた。最後に新内浄瑠璃の人間国宝の鶴賀若狭掾氏が登場、悲恋話を三味線の音に合わせて、憂いある語りでしつとりと聴かせてくれた。

かつて村人たちの娯楽の場であった農村舞台、戦後の経済成長の中でいつの間にか忘れ去られてしまいそうになっていたが、大切に保管されていたえびすの木偶は復活の日を信じて、五十年の歳月を待ち続けていたのだろう。この日のために舞台を復活させ、動きを忘れていた木偶に命を与えた村人たちに敬意を払わなければと思う。今後の更なる活躍を期待するとともに、今後は木陰で風を感じながら、公演を楽しみたいと思う。

魅せられて

文化遺産を未来につなぐ

森つくりの為の

有識者会議事務局 足本裕子

あいにくの雨の中、信じられないくらいの人出と静かな熱気に感動しながら最初から（三時間も前から）最後まで見続けました。東京に戻ってきてからも、頭の中がいつばいでした。

拝宮という地に遺されていた農村舞台の価値や意義を掘り起こし、その復活を願った方々やそれを受けて立ち上がった住民の方々。尊敬します。その熱意や誠意、思いや目論みや不安など、様々に交錯し様々なドラマがあったことと想像するばかりですが、今回の復活公演という事実は、私には一筋の光をいただいた様に思えたのです。

かつて人々が華やかにさざめき集まったであろう舞台のかかった日の思い出。五十年という月日に絶望することは無いのだと、人々の心の裡にそんな宝物が遺っている限り復活することは可能かもしれない、と思えたのです。

たかさんの人の手を経て大切に伝えられてきた「古き良きもの」を未来につなげてこそ、今私たちが生きている意義もあらうというもの。大きな勇気をいただきました。

案内チラシに使われていた写真。芽吹いたばかりの若葉に縁取られる様に息づく舞台には惹かれました。新緑の頃立ち上る木々の香気に浄化された境内や、秋には柿の実のなる里にも行ってみたいも

のです。セッコクの花にも出会えるなんて運がいい。まことに拝宮とは魅力あるところ。行って良かったと満足しているのです。たかさんの方々に感謝をこめて、ありがとうございます。



私の新内普及宣伝啓蒙と 伝承継承活動のキーワードは「輪」と「和」。

新内節浄瑠璃 鶴賀若狭掾

昨年の十二月に始めて徳島市を訪れた。明石海峡大橋と鳴門大橋を車で渡って見たいと思い、新幹線を新神戸で下車しレンタカーして走った。その日は風が強く眺望を満喫するどころではなく速度を緩めて恐々徳島に正午頃入った。その夜松茂町で東京都無形文化財の八王子車人形の公演があり「弥次喜多」の新内浄瑠璃を語った。終演後市内のホテルに入り近くの居酒屋で食事を済ませ早々と寝ようと思っていた。が何故かフロント回りでウロウロとしていた。そこへ日経の情熱家の鈴木氏が「弥次喜多見ましたよ」と言いながら入って来た。この出会いが運命的？宿縁の？な繋がり縁となった。

鈴木氏はロビーの椅子に座り一冊の本を広げた。西田茂雄氏の阿波の農村舞台の写真集であった。私は何となく説明を聞きながら見ていた。そしてその写真集を手に取り見ているうちに魅入った。写真が素晴らしいからだけではなく、日本の伝統芸能の原点を感じ先人の篤くひたむきなそして純真無垢な芸能への思いが伝わって来て、私の心に言い知れぬ感動と懐かしい思いが、そして芸人の魂の奥にガツンと打つ響きを感じたのは決して大げさではなかった。「こういう農村舞台で新内を演奏したいな」と即座に鈴木氏へ訴えた。「本当ですか？」「勿論です」これで実現の話が半分纏まった。あとは

場所と日時の調整を残して明るく日また車で戻る。帰路は快晴にして波高のだが視界良好で絶景を楽しみつつドライブ。年末年始の繁忙から小正月も過ぎた頃に鈴木氏から電話が入った。そして大和先生と三木女史と三人で私の演奏会に懇々上京された。そして農村舞台での新内演奏が実現する運びとなった。

三月十六日一回目の打ち合わせに徳島へ。徳島県知事を表敬訪問後に鈴木氏の車で上那賀町の拝宮農村舞台へ向かう。四国は山が深い、特に徳島県は険しいと聞いていたが天下の剣の箱根よりも山々が前に聳え後ろにそそり立つ。約二時間走った国道からさらに峻険な急斜面を這い登って拝宮に到達。鹿と猿と猪が出て作物を荒らすのもうなずけると思いつつ白人神社の境内へ上がった。そこに神聖にして幽玄的静寂なる佇まいと懐かしい遠い昔の先人の声が聞こえ、その心を感じる神々しい雰囲気待ち構えていた。このような清しい感動に心が鎮まる。舞台では村の方々が忙しそうに楽しそうに心一つにして舞台作り精を出していた。保存会会長の井本さんと和紙工房の中村さんや多くの皆さんの暖かい歓迎を受けて感激。村中の熱い思いがひしひしと伝わって来る。拝宮舞台半世紀振りの復活公演に対する地元の人々の情熱に心打たれる。これなら舞台公演成功間違いなしの思

い強く持ち、六月六日を約し帰京した。

前前日徳島入り、前夜祭も程々に用意万端整ったその当日、整わなかったのが天候。朝からの雨。恨めしいとは思ったが、いやいや神様の嬉し涙と聞かされて天与の雨に感謝。開演前からこの山中に

来るわ来るわのお客さん。私の予想をはるかに超えた人・人・ひと。境内は満員となり舞台正面の山の斜面に作った丸太の腰掛けも一杯でまさに鈴なり。カメラの放列傘の花。遠方も雨も厭わずお越しになる皆さんの熱い思いは何なのか。永い伝統を育んできた芸能好きな阿波の土壌なのか、神様を敬いご先祖を慕い亡き人を供養し魂との出会いを体感するのか、郷愁なのか皆さん引き寄せられる如くにより集う。舞台の裏の楽屋は子供達大勢で楽しく賑やかだが、私たちは今までにない緊張感が走る。小雨の中に幕が開く。絶対的晴れ男の私だから必ずや雨上ると信じて出を待つ。サア出番。幕前で挨拶・解説と話をする内見事雨上がるから不思議の念力。新内の代表曲「蘭蝶」「関取千両幟」の二曲を語る。聴きなれない馴染みの無い新内だけにお客さん方に理解・愉しんで頂けるか多少は案じたが、終演まで静聴して下さり安堵した次第。直会（打ち上げ）の時も帰京後にもご来場の方も関係者の方も、皆さん大変喜んで下さったとの事を聞き胸をなで下ろした。白人神社の神様はお喜びになると雨が降ると聞くがその晩の豪雨は半端ではなかった。拝宮舞台での演奏の今迄にならぬ喜びと感動は何だろうと考えつつ床に就く。村の皆様と関係者の並々ならぬご努力と誠実真摯な姿に心から敬意と感謝を申し上げます。私で宜しければ次回も



参画させて下さい。

新内をより多くの人に聴いて頂き知って頂きそして新内の宣伝普及と伝承継承する事が私の使命であり喜びであり生き甲斐でありそして私のライフワーク。新内を天職と思う私は人間国宝に認定されてより「輪」と「和」を以て生涯この新内を伝え拡げてゆく事を決めたのです。

